戦争は終わった

村山ひで著

駒草出版

戦争は終わった

村山 ひで著

村山ひで
1908年　山形県東根市に生まれる
1928年　山形師範専攻科卒業
1933年　村山俊太郎と結婚
1949年　レッドパージで教壇を追われる
1954年　山形県教員組合書記（71年まで）
主な著書　「北方の灯とともに」（麦書房）
「明けない夜はない」（労働旬報社）
「愛とたたかいの詩」（労働旬報社）
「母・教師・生活者として」（労働旬報社）
「この魂ひとすじに」上・下（新生出版）
「愛する者たちへ」（新生出版）
現住所　山形県東根市三日町1－7－12

戦争は終わった

1982年12月10日　初版発行　　**定価　1200円**

検印省略

著　者　村　山　ひ　で
発行者　村　山　　惇
発行所　駒草出版株式会社
〒106 東京都新宿区高田馬場2－6－10
電 話 209－8511　振替東京8－14238
印刷所　文　言　社

© 村山ひで 1982　落丁・乱丁はお取り替えいたします

0037－2007－2496

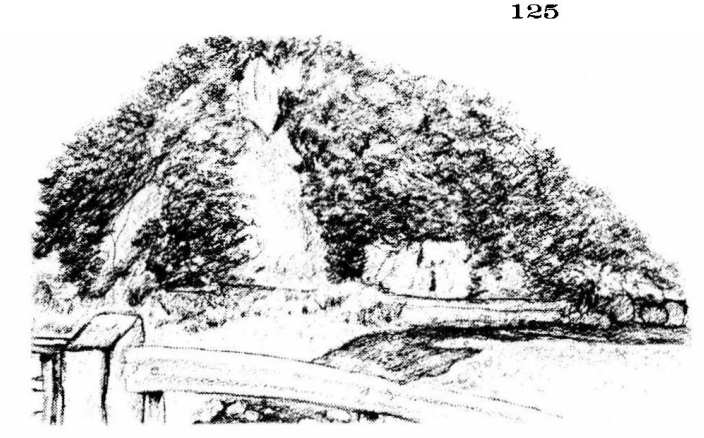
もくじ

戦争は終わった……5
アメリカ軍がきた……13
戦争に負けてよろこんでいる人がいる……17
簞笥の中の米と大豆……23
ささの実とおがくずパン……27
厳しい冬を前にして……30
お前の父ちゃんスパイだ……36

鮭かんと雑のうの配給……41
教科書に墨をぬった日……50
「野鳥と共に」の勉強……57
奉安殿がこわされた……63
ピアノどろぼう……69
愛国号は飛ばなかった……73
牛と葡萄……81
いもはくされてしまった……87
演壇に立った父……91

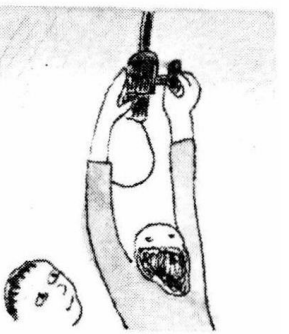
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

軍政部に呼び出された……96
雑誌『子供の広場』……101
じゃがいも小屋いっぱいにお客さまがきた……125
母ちゃんの勉強……135
新しい憲法……139
世紀の教師……143
先生の自殺……147
じゃがいも小屋に別れて……153
おばあちゃんの家に帰る……161



すりこぎさげていばっている……169
遺骨が帰ってきた……172
町はパンパンの基地になった……178
杏の花のうた……183
あとがき……189

装丁・カット——小原由紀子



1　戦争は終わった

戦争は終わった。太郎の家では電燈の防空カバーをはずして赤々と電燈をつけた。すすけた小さな納屋はまばゆいくらい明るかった。

その電燈のもとで、ゆったりと白い胸をひらいて弟の仁に乳をのませている母、安子のそばを四人の兄弟がとりかこんだ。

つい先日まで奥羽山脈の関山峠から山を越えてきこえてきた宮城県釜石の艦砲射撃のドーン、ドーンと腹わたをゆさぶった大砲の音も、ラジオからきこえてきた仙台や秋田の空襲の雨のふるような機関銃の音も、もうきこえてはこなかった。

太郎の家では父が病気で、防空ごうもつくれなかった。毎日空襲がつづいて、父と、弟をおんぶした千代ねえやと、妹の幸子は山に逃げてジーッとして空襲のやむのを待つ日が

幾日かつづいていた。
幸子は毎日の空襲にもうへとへとにつかれて、母のそばに倒れるように眠ってしまった。
いろり端に座っていた父、田村修作は、こいひげづらを太郎たちにむけて、
「もう戦争は終わった。父ちゃんの病気もよくなるだろう。お前たちも、勉強できるようになるぞ。」
と久しぶりに明るい顔を子どもたちにむけた。母には、
「治安維持法は即時撤廃になるだろう。そして政治犯は即時釈放だよ。もう自由になるぞ。」
と語りかけたが、太郎の母はまだその意味がよくわからないようであった。
太郎の家の裸電燈が消えて、敗戦の夜はふけていったが、田村修作はようやく自由になるこれからのことを、あれこれと思い浮かべて、なかなか眠れない夜であった。
「生きるんだ。新しい夜あけにむかって。」
と叫んだ。
小さな納屋の家族たちは、深い眠りに落ちていて、母のそばに寝ていた仁が、大きくどたりと寝がえりをうった。
一夜あけると、日本には新しい時代がきていた。

基地神町の海軍兵たちは、関山街道にかくしていた、ガソリン、アルコールのドラム罐をトラックでどこかに運び去っていく。

宮城の広場では、腹をかき切る軍人もでたとラジオは報じた。こうなると、村の人たちも敗戦を信じないわけにはいかない。

村では、

「アメリカ兵は、女はつれていって二号にしてしまうし、男たちの金玉は抜くそうだ。」

太郎たちはそのうわさに驚いて、

「父ちゃん、アメリカ兵は女をみんなつれていき、男の金玉を抜いて日本人を亡くして仕舞うそうだ。ほんとうだかや。」

まだ学校にいかない三郎はおそろしくて、

「にいちゃん、おっかないなあ。」

と大きな目をくりくりさせて兄にすがりついた。

父は笑って、

「上陸してくるアメリカ兵は、民主的な人たちをえらんでくるだろうから、そんな野ばんなことはしない。」

とはっきりいった。

次郎は膝をのり出して、

「父ちゃん、アメリカ兵は戦争中の日本の海軍のように藁で編んだ手袋などしていないべな。上官ばっかり大きな箱ゾリに乗って、若い予科練生にひっぱらせていばっていた神町の海軍兵のようではないべな。」

と問いかけると兄の太郎も、

「何時も腹へらして村の百姓の家に食べ物をもらいに来るような予科練生みたいな兵たいではないだろうな。」

三郎はまた戦争中兄たちからきいていたおっかない話を思い出して、

「父ちゃん、アメリカの兵たいたちも上官が兵たいをかしの棒などでぶんなぐるかや、死ぬみたいになるとバケツで水をぶっかけて生きかえらせてまたぶんなぐったりするかや。」

まだみたことのない上陸してくるアメリカ兵をそれぞれ想像してこわがった。

八月がすぎ、夏休みも終わって九月に入り、太郎たちは厚ぼったい防空帽をかなぐり捨て、さわやかな秋風にふかれて登校していた。

太郎が父の休んでいる部屋に「ただいま。」とあいさつにいくと、父は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「太郎、明日仙台から関山峠を越えて米軍が山形市に進駐してくる。よっくみるといい。」
といった。太郎は、俊三たちがまだアメリカ兵は金玉を抜くという話を信じているのを思いだした。
「そうだ、アメリカ兵をみればわかるんだ。みんなでみよう。」
と弟の次郎と相談して、みんなを集め、みんなでみようと思い立った。
次郎は川原子、太郎は谷地中、小原と手分けして、村をはしりまわった。
太郎が谷地中の俊三の家にいくと、俊三はうさぎにえさをやっていた。
「おい俊三さ、アメリカの兵たいは、男の金玉などぬいたりしないど、明日(十七日)関山のほうから進駐してくるから、ぼくの家の前、関山街道でいっしょにみよう。」
とさそうと俊三は、
「ほんてだかよ、ほんてだかよ。」
とうたがった。太郎は一生けんめいになって、
「俊三さ、ほんてだど。ほんてだど。アメリカは民主的な人たちをえらんでくるから、そんな野ばんなことはしないってよ。だからなれ、勇三さや新吉たちにもしらせてくれ。おれは、なお子たちにも話してさそってくっから。」

と俊三を説得して別れた。
次郎は小原部落の宏をたずねた。
宏はほっかむりをして、牛小屋から牛の糞を庭に運び出していた。
「おい宏くん、あしたアメリカくるぞ。関山のほうからおらえの家の前を通って山形にいくそうだ。みにこないか。アメリカ兵は金玉など抜いたりしないそうだ。もう戦争は終わったんだもの。」
次郎は宏を説得して、友三の家に走った。次郎は毎日の空襲で逃げまわったときのあのおそろしさはなく、父ちゃんのいう民主的な兵たいたちはどんな兵たいたちであろうと思うと、心があかるかった。
九月十七日、もう敗戦から一か月がすぎていた。
太郎たちは街道の片側に並んでアメリカ占領軍のジープを待った。
ジープに乗ったアメリカ兵が関山のほうから太郎たちの村にはいってきた。かわいた村の街道も街道に並ぶ農家もことりとした音も立てず、死んだように静かであった。
村の人たちは、家の中に閉じこもり、すだれをかけた小さな窓を小さくあけて占領軍のジープをじっとのぞいた。

街道にでて堂々と占領軍をむかえたのは、太郎と次郎のさそった、俊三、勇三、新吉、宏、なお子、友三と、太郎の家族の父と母と三郎、弟の仁をおぶった千代ねえやと、大家のおばあちゃんだけであった。

村に入ってきたジープのアメリカ兵は、白い肌がまっかに陽やけして、猿のようであった。ジープから編みあげ靴をはいた長い足をぐっとつき出して、向きたいほうをむいて乗っている。

アメリカ兵をみた子どもたちはすっかりどぎもを抜かれた。ジープにみんな乗っていて、歩いている兵士などは一人もいない。子どもたちの知っている日本の予科練兵などはトラックにも乗らないで草鞋をはいて歩いていく兵士がたくさんいたのにと太郎は思った。

次郎は、これが父のいった民主的にえらばれた兵たいたちなのであろうか、と思った。仁をおんぶしてみているねえやのお千代にも、兄ちゃんのくみのなおちゃんにも、ぼくの母にも、なにも乱暴なことはしなかった。男の子のぼくたちにも何にもしなかった。次郎はうれしくなって、

「兄ちゃん、父ちゃんのいうとおりだな。それなのに村の人たちは、どうしてあんなにアメリカ兵は金玉を抜くなんていうのだや。きっと中国の戦地で女や子どもを殺したり、食

べるものをかっぱらったりしたから、自分たちもそうされると思っておっかなかったんだな。」

とようやくなっとくできたように兄に話しかけた。

ジープは村を通り抜け、黄色に色づいた稲田の中を、砂煙をあげて走り去っていった。

※治安維持法――国体の変革、私有財産制度の否認を目的とする結社活動および個人的行為に対する罰則を定めた法律。主に共産主義活動の抑圧策として違反者には極刑主義がとられ、言論、思想の自由をうばった。敗戦後、昭和二〇年一〇月廃止された。

2　アメリカ軍がきた

太郎親子の出迎えた米軍が正式に海軍基地の神町に初進駐したのは二日おくれて二十年九月十九日であった。

神町を管轄する楯岡の警察署長は、神町にも占領軍が進駐するということが確実になると、

「相手は兵たいのことだ。何をするか知れたものではない。とりわけ婦女子に対する暴行が一番心配だ。」

というわけで、県の指図で神町周辺の各町村をまわって、矢継ぎ早やに婦人講演会を開いて歩いた。

「外国人は習慣がちがうから、何を話しかけられても、決して口をきいてはいけない。日

本人は愛想がよいといって、ニコニコすることを一つの美徳としているが、向こうの人は、愛人以外に笑顔を見せない。下手に笑ったりすると、これをOKの意志表示だと間違えられて、ヒドい目に会うぞ。」

とまことしやかにぶって歩いた。

昭和二十年九月十九日、いよいよ占領部隊七百人が神町に進駐した。占領部隊の初進駐という、県史上最大の出来事であったにもかかわらず、知事や警察部長という、県主脳部はだれひとりとして姿を見せないで、現地に任せきりであった。

当時の楯岡警察署長は、「山形県警察誌」に次のような一文を残している。

「私は東根町長、工藤恒太郎、北村山地方事務所長、木村宗三郎、鈴木楯岡動員署長の三氏とともに、神町駅頭に迎えた。

神町大通りの戸は閉ざしてしまって、人っ子一人として姿を見せない。全く死の町であった。

この時ほど強く印象に残ったことは、私の一生の中でもそうザラにあるものではない。

神町の町民は、数日前からあっちこっちの親類を頼って泊りこんでしまい、どこの家でもやっと留守番をおくのがせい一ぱいであった。まず女子供が一番危ないというので、こ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com